

## 1948年福井地震の際の大和百貨店の中の人間行動に関する資料

### 『福井店始末記』

戦災を免れた金沢本店と武蔵店、高岡店、新潟店の店内は一応整備され商品も充実した。焼失した富山・福井の両店も応急復旧から順次売場の拡張が行われていった。そして折柄の闇市や闇相場の横行するなかにあつて、あくまで明朗な生活物資の配給および販売の機関として悪戦苦闘をつづけた。営業は漸次軌道にのって少しずつではあるが、デパートらしいかたちに復元してゆく曙光が見えたとき、意外の天災がふつてわいた。

福井店は1階から6階までを戦前通りの姿に復旧、工事が完了し、中元大売出しを契機に、一挙にデパートの真価を発揮しようと、西野浅雄支配人以下全力をあげて商品を充実した。そしてこれならいけると張り切っていた矢先、昭和23年6月28日、午後5時18分、不気味な地響きとともに福井全市が大揺れにゆれた。店では当日従業員組合の大会を催すことになっていたもので、閉店時間の5時を過ぎると同時に全員が6階の食堂に集合、議事に入ったとたんのできごとであった。

大音響とともに6階と5階の売場の床が墜落、6階にいた店員の大部分は床とともに5階に転落した。階段はふさがれて逃げ道はない。地震は不気味にぶり返してくる。恐怖におののきつつ逃げ場をもとめる店員達の眼に、6階食堂に備えつけられていた鉄製の煙突が、5階の窓に折れ曲って仮橋のようになっているのが写った。とっさの機転で、一人がこの煙突を伝って6階に逃れ、6階から更に屋上へ出た。全員がこれに真似たことはいうまでもない。そして屋上から非常用の避難階段を伝って、一人のこらず地上に達することができた。そしてホッと一息ついたのは午後6時20分、その直後、建物は類焼をうけ、またたくうちに全館焼失してしまった。まったく一瞬のできごとといっても良いくらいで、もしその日従業員組合大会が無かったとしたら、閉店後まだまだそれぞれが売場の跡片付けや、翌日の準備のために各階に居残っていたに違いないのである。当然、逃げ遅れる者、逃げ場を失う者、多数犠牲者を出していたに違いないのであつて、全店員が一堂に在り、互いに励ましあつて難を逃れることができたのは、たとえ重傷者2名、軽傷者数名を出したとはいえ一人の死者も無くてすんだことはまったく不幸中の大きな幸といわねばならなかつた。

恰度そのころ、衆議院議員であつた井村社長は、国会用務のため東京に在り、ラジオを通じて福井地震を知つた。そこへ村専務からの連絡電話が入つたのだが、社長は専務の報告に対してまず口をついて出た言葉は「店員はみな無事だったか」の一語であり重ねて「それを一刻も早く調べて報告してくれ」と言葉をつづけた。そして井村社長はその夜から内閣に設置された福井震災対策本部に詰め切り、現場からの情報を速かにキャッチし、同時に政府が早急に具体的な援助の手をうつよう夜を徹しての活動に入った。このとき、まだ外部にはぜんぜん発表されてはなかつたが「井村社長はどこまで運の強い男か」とごく一部の事情を知る人たちは驚嘆したのであつた。それは、このときすでにこの福井店の建物土地は有利な条件で他へ売却されていたからである。

それは織物景気でその年の日本の長者番付のトップにその名を揚げられていた福井市の加藤尚の懇望によるものであり、売買が成立したのは最近のことであつた。したがつて地震にあつたとはいいいじょう、店員にはたいした犠牲もなく、商品を焼いただけで小難で喰い止め得たのであつた。その福井店の売却というのは、井村社長は戦後のデパートの将来について、確固たる見通しのもとにいろいろ構想を練つていた。そして数年間にわたる福井店の経営を通して、実は福井における百貨店事情の難かしさを痛感していた。一方東京進出の計画が具体化し巨額の資金を必要としていた。そこへ前記加藤尚の方ではいかなる計画があつたものか、福井店の建物を買いたい旨を申し入れてきた。しかもその条件は「1階から5階までは従来通り大和でデパートとして使用して貰え

ば良いので、6階だけを明け渡してもらって当方で使いたい」という非常に有利なものであった。しかも条件は、それだけでなく、売買はしても、当分登記はしないでおきたいという加藤からの申し出で、金だけ受けとって、さっそくその金の一部を各店の復興、復旧の資金ならびに、新計画の東京進出の費用にあてて、銀座7丁目の支店開設とはなったのであった。

こうした内実はともあれ数年の間に戦災と震災と、手ひどい打撃を二度までうけた福井店は、震災後ただちに附近に仮営業所を設け、再開を期したが、崩壊した福井店の建物は加藤尚の方では当分復旧の意志がなく、創業以来の営業実績等を十分検討した結果、大和としても福井店を放棄することに意見が一致し、昭和26年12月、株主総会席上で全員の賛成を得て福井店閉店が決定した。一殺多生の理に従ったのであり、徒らに進むばかりではない、機をみて退くことも知る井村社長のこうした際の英断があってはじめて今日の大和の隆盛が早められたのであるが、今日の北陸を広く掌握する姿をみるにつけ福井店の不運と放棄は、やはり痛惜の感なきを得ない。

井村徳二伝記刊行会『井村徳二伝』（昭和40年4月18日発行）より抜粋

### 『福井地震と福井店(昭和23年)』

空襲をうけてから7日目で仮店舗で営業を開始した不死鳥の如き福井店は、昭和23年6月ともなると、1階から6階までが戦前どおりの姿に復旧工事完了、中元大売出しを控えて西野浅雄支配人以下はり切って商品の充実に努めていた。その6月28日、午後5時18分、不気味な地響きとともに福井全市に地震が襲った。大音響とともに6階の床が5階に墜落、おりから従業員大会で全員が6階に集まっていたので、はからずも全員125名一致の行動がとれ、怪我人を少々出しただけで、6階食堂の煙突がぐあいよく折れてくれたのを伝って、全員脱出に成功したのは全く天佑神助の感があった。衆議院議員として東京に在った井村社長は、即刻内閣に福井震災対策本部をつくり、そこに詰め切って具体的な援助に努力した。この福井店の被災は、彼自身が自分の幸運に驚いたほどで、建物は実は東京進出のさいに必要な土地との交換で、すでに井村の手をはなれ、賃貸契約が成立していた。井村から福井店をゆずりうけたのは、織物景気でその年の日本一の多額納税者になった加藤尚であった。譲渡の条件は、1階から5階までを永久賃貸契約で大和が営業をつづけるという、大和にとって非常に好条件であったのだが、醜い残骸を晒す焼跡には、加藤も直ちに復興する意志がなく、大和としても創業以来の営業実績を検討した結果、同年12月の株主総会の決議により福井店をこのさい放棄することに決定した。罹災前の福井店は羽二重景気で最好調を示しており、全店中第一の業績をあげていたのであるが、東京進出その他の充実により福井を失うことは発展的解消というべく、ただいつの日か福井へ帰って、開店以来大和が福井市民からうけた恩顧に報いたい、というのが偽らぬ引き揚げに際しての社長はじめ幹部の気持ちであった。なお、一挙に引きあげたのではなく、小さく福井営業所として存置したが、これも状況により昭和25年12月、全面的に閉鎖した。

『大和五十年のあゆみ』北国出版社（昭和47年9月27日発行）より抜粋

#### [註記]

以上の2編は、以前(2009年)、福井地震の際の大和百貨店の被災状況について、大和デパート金沢本店に問い合わせた際に、(株)大和業務開発本部の岡本志郎氏(当時 総務部長)から、震災当時の従業員名簿とともに提供を受けたものである。

## 『激震の中で』

加藤恒勝 [福井市豊小学校教諭, 現在：福大附属小学校教諭]

福井地震。わたしは映画館で罹災、梁にはさまれた腕を上膊部から斧で切断して脱出したのである。市内のあちらこちらでおきた火の手がだんだんと迫って来た時、わたしは腕を切断してのがれる決意を、その時までつきそって来ていた見ず知らずのひとりの男に話した。彼はしばらくして手斧と腰ひもを持ってやって来、「自分で切れ」と言った。わたしは、三、四回みずからの左腕に向って斧をたたき込んだ。しかし、とうてい自分で成しえるわざではなかった。そのあとを引き受け、骨までも打ちくだいてわたしを救い出してくれたのはその人であった。(彼は、その映写技師で、山崎という長野県人であった。) わたしは、山崎さんとマカラン屋の若い主人との二人によって、当時の順化小学校の校庭へ運びこまれた。チンピラふうの男が「これ喰えよ」と、チョコレートとりんごをくれた。満足に食べられる体力はもうなかったが、のどがかわいていたのでそのりんごを何度かかじった。風体はどうであろうと、その人のなさけをつくづく感じた。

重傷のわたしを、そこから城内の医療所まで運んでくれたのは、品川書店の主人と仏具店の松川さんと市役所の緑川さんであった。戸板がゆれるたびに腕の切り口をおおった布からは、血が泡になってふき出た。品川さんたちは、わたしを激励し続けた。仮設医療所では、アメリカ人の軍医に緑川さんは「この人はティチャーです」という意味のことをくりかえし、応急処置を一心に頼んでくれた。夕刻、県立病院へ運びこまれた。野外で小坂医師により、止血の手術をうけた。余震のたびにおののく看護婦さんたちを叱責しながら、てきぱき手術をはこんだ小坂医師の顔が、ローソクの光に輝いていた。次の日、重傷のわたしは、鯖江の国立病院へうつされた。この患者輸送のトラックはだるま屋デパートのものであった。緑川さんをのぞけば、かつて何の面識もなかった人々によって、わたしのいのちはリレーされたのである。職業も国境をもこえて。しかし、一命をながらえたわたしを再起させたのは、先輩や後輩、なかまの教師の友情であった。

『県教組 20 年誌, 第 3 章 福井地震と県教組, 1950』より

### [註記]

以前、福井地震の文献調査のために福井市を訪れ、福井市立図書館を訪問したことがあった。その際に偶然にも受付カウンターで、そこに勤務しておられた加藤恒勝氏に出会った。その時、片腕を失くされた経緯についてお話くださり、上記の体験談のコピーを戴いた。大和百貨店とは直接の関係はないが、極めて貴重な体験談であることから、ここに掲載させて頂くこととした。